

聴覚障害学生のバレーボール指導について

—手話での指導と指のサインプレーの重要性—

聴覚部建築工学科 今井 計

要 旨：平成3年4月本学に着任し、学生の要請に応じてバレーボール指導している。まず、バレーボール経験の有無を聞き、経験者・未経験者のプレーぶりを見て指導を始めた。1年間指導して、健聴者のように声で連携プレーができないため、アウトボールに触ったり、お見合いをした。そこで聴覚障害を加味した実戦法として、指でサインを送る指導をした。2年目に新体連北区連盟、3年目に関東大学男子バレーボール連盟に加盟し（本学運動部で大学連盟に登録するのはバレーボール部が初めて）、リーグ戦に出場した。その際、健聴者との違い（笛が聴こえない、審判の問題）をわかっていただいた。健聴者との試合では、私が声を出さずに手話で作戦を与えることがプラスになった。またトラブルを少なくするために、体育館にフラッシュランプの設置の普及という問題点もあった。聴覚障害学生を手話で指導する際に「指のサインプレー」「反復練習から体で覚える」「状況判断」が大切だということがわかった。

キーワード：聴覚障害、バレーボール指導、サインプレー、健聴者との試合

1. 【未経験者の指導と練習試合】

メンバー構成を表1に示す。9人の学生が本学入学までにスポーツを経験している。バレーボール経験者は、レシーブ・スパイクを見て判断した。未経験者は、パスの構えと前後左右にボールを散らせて、体の正面でボールを取ることに、足の運び方を覚えさせた。スパイクはスウィングと壁打ちをやった。

練習の最後にバランス良くチームを分け、乱打をやった。そこで未経験者は経験者と一緒にやることで、「自分には何が足りないのか」、「どんなプレーを身につけたらいいのか」ということを自覚させるようにした。

6月末に力を試すため、私が所属する千川クラブ（東京：社会人）に練習試合をお願いした。結果は1-6で惨敗したが、チーム内で目標を持ち、積極的に練習するようになった。以後9月、12月にも練習試合をやった。その他筑波大バレーボールサークル、筑波大医学専門学群、筑波大附属聾学校歯科技工科とも練習試合を行った。

公式試合に参加したい気持ちが強まり、問い合わせてみたが、筑波にバレーボールのカレッジリーグはない。地域の社会人の試合は、学生登録は認めていない。

2. 【新体連での問題点と解決法】

2.1 交流試合での審判の試行

そこで、千川クラブが参加している新体連東京都北区リーグに聞いたら、運営委員長が「交流試合をして、来年参加できるか判断して下さい」という返事もらった。

表1 メンバー構成

第1期卒業生から現在までのメンバー

	学年	身長	バレーボール経験及びスポーツ経験の有無
K.Y	卒	170	有（高校1年間）、大学1年の時陸上部
Y.F	卒	183	無（高校：ゴルフ部）、大学1年の時テニス部
J.F	3年	173	無（聾学校中・高等部：卓球部）
K.Y	3年	173	有（聾学校中等部3年間）
K.N	3年	178	有（高校3年間）
K.N	3年	165	無（聾学校中・高等部：卓球部）
K.Y	2年	175	有（中学3年間、聾学校高等部2年間）
K.N	2年	175	有（聾学校高等部2年間）、中学の時バスケット
T.U	1年	168	無（聾学校野球部）
K.Y	1年	163	無

ルール・記録は勉強会を開き、試合のビデオで見ながら記録をつける練習を繰り返した。ラインズマンは、練習中にIN・OUTの旗の上げ方を指導したが、問題は主審・副審でプレーヤーからの質問がわからない、説明ができて発音が不明瞭のためプレーヤーは聞き取りにくい、ブロックの微妙なワンタッチの判定ができないことだった。どの位できるのかを交流試合で試し、その結果私が通訳で審判台の脇につくという条件で運営委員会で正式に加盟を認めていただいた。

2.2 指のサインプレーの試行

チームの形ができ、近畿地区ろう学校大会で優勝経験を持つ新入部員が2人入ってきた。

1年間指導して感じたことは、彼らは健聴者のように声で連携プレーができないことだった。例えば「IN・

OUT・ワンタッチ」のジャッジを声でできないために、アウトボールに触ったり、お見合いをしたことがあった。そこでリーグ戦が始まる6月までは、声を代わりに指でサインを送る練習などをした。サーブレシーブのジャッジは、「OUT」の時に、両手をあげたり、足で床をたたいてレシーバーに振動で知らせる。(床が木製の場合は成功した)他のプレーの場合は、とっさの判断のため床をたたく余裕はなかった。スパイクのサインは、サーブを打つ前にセッターが、スパイカーのサインを見る事にした。サーブレシーブの時は、スパイカーがセッターのサインを見た。例えば、指文字の「お」はオープンとか「れ」はレフトという約束をした。

レシーブが乱れた場合、つなぎのトスをあげる人を決め、コート外にはじかれたボールはいちばん近い人がつないだ。

2.3 対策と反省

リーグ戦は毎月第3日曜日に総当たり2回戦を行った。(参加チームは9チーム)リーグ戦中は練習に加えて、当日ビデオ撮影を行って、後日それを見て反省会を行った。また今度対戦するチームのビデオがあれば、それを見て対策を立てたこともあった。

結果6位だったが、健聴者のチームと試合ができたことは、大きな自信となったが、指でサインを送ることは充分できなかった。特にラリーが続くとセッターとスパイカーのタイミングが合わなくなり、失点したケースがあった。この1年間は、バレーに対する考え方やチームの方向性など、私自身学生と衝突し、学生同士でも衝突があり、チームをまとめるのに苦労した。

2.4 指のサインプレーの先駆者

この年に、関東ろうあ者・全国ろうあ者体育大会を見に行った。全国大会は、平成5年7月ブルガリアで開催される世界ろうあ者体育大会のメンバー選考会を兼ねていた。鳥取、東京、広島は健聴者のチームではないかと思うくらい息も合っていた。やはり細かく指でサインを送っていた。正月にはオリンピックの第1次合宿(沖縄)の練習の手伝いに行き、各チームの代表選手に聞くと、状況に応じたサインがたくさんあることを知った。例えば、時間差攻撃の時は、サーブレシーブの返球が悪い場合、練習中にそれに代わる次のサインを決めていた。そうするとセッターに高い能力が必要だと感じた。私は、翌年7月の最終合宿(東京)にも参加できた。

3. 【大学リーグでの問題点と解決法】

3.1 加盟審査

学生からはやはり「健聴者の大学生と試合をやりたい」という希望が出て、大学リーグ連盟事務所へ出かけ事情を説明した。

特に彼らは耳が不自由であり、健聴者との違い(例えば、笛が聞こえない、審判の問題)をわかっていただいた。監査役の先生が彼らの様子を聞いた上で、「障害がある、なしは関係なく、登録する条件が満たされていれば充分です」という回答をいただき、後日正式に理事会で承認されて、平成5年度から関東大学リーグに加盟することになった。

3.2 目標とサインプレーの見直し

大学リーグ(最下部は15部)に向けて、春季リーグで勝ち14部へ、秋季リーグで勝ち13部へ昇格するという年間の目標を立てて、練習を開始した。チームとしては、各人役割を決め、拾ってつないで、エースに打たせるという方向で戦った。

指のサインプレーについては、クイックが打てるようになったので、種類を増やした。例えば、平行トス是指文字の「へ」、セミは「せ」、バックセミ「た」、Aクイックはアルファベットの「A」、ライトへのランニングスパイク(専門用語でCワイド)は手話の「トイレ」(CとWを組み合わせて)と決めた。

3.3 春季リーグの反省点と対策

春季リーグの結果を表2に示す。初日は、相手チームがわからない状態でいきなりの連敗スタートでショックが大きかったようだが、その後5連勝ということで初日が悔やまれた。以前よりもラリー中に指でサインを送れ

表2 平成5年度関東大学男子バレーボール
春季15部リーグ戦績表
会場 都立科学技術大(東京都豊田市)

大学 順位	国香館情 報大	東京医歯 科大	都立科学 技術大	武蔵野 美術大	北里大	八千代 国専大	筑波技術 短大	白鷲大	勝 敗	最終 順位
国香館情 報(14.7)	国情 3-0	○ 1-3	× 0-3	× 0-3	○ 3-2	× 2-3	× 0-3	2 5	6	6位
東京医歯 科(14.8)	× 0-3	医科 3-2	○ 3-1	○ 0-3	×不 0-3	○ 3-2	×不 0-3	× 1-3	3 4	7位
都立科学 技(15.3)	○ 3-1	× 2-3	都立 2-3	× 1-3	○ 3-2	× 1-3	× 0-3	2 5	5	5位
武蔵野美 術(15.4)	○ 3-0	× 1-3	○ 3-2	美術 2-3	× 3-1	○ 0-3	× 0-3	3 4	4	4位
北里 (15.5)	○ 3-0	○不 3-0	○ 3-1	○ 3-2	北里 3-0	○ 3-0	× 1-3	6 1	2	昇格
八千代国 専(15.6)	× 2-3	× 2-3	× 2-3	× 1-3	× 0-3	国際 1-3	× 0-3	0 7	8	8位
筑波技術 (新)	○ 3-2	○不 3-0	○ 3-1	○ 3-0	× 0-3	○ 3-1	筑波 × 0-3	5 2	3	3位
白鷲 (新)	○ 3-0	○ 3-1	○ 3-0	○ 3-0	○ 3-1	○ 3-0	白鷲 3-0	7 0	1	昇格

*不:不戦勝及び不戦敗、(新):新加盟、(14.7):前年秋季リーグ戦14部7位、昇格:次期リーグ戦は14部へ

るようになったが、クイックのタイミングがずれる事が多かった。試合中にしっかりした対策を立てれば、負けるような相手ではなかっただけに私自身データ分析の重要性を痛感し、秋季リーグの目標を14部昇格と決めた。

3.4 秋季リーグに向けての強化

3.4.1 サーブの変化とスピードに慣れる

サーブレシーブ（3人1組+セッター）の練習では、私と学生で工夫してオーバーハンド、サイドハンド、フロッター、ドライブ、ジャンプといったサーブを長短強弱をつけたり、エンドライン際から壁まで徐々に下がったり、変化・スピードに慣れるように打った。1本1本打たれる時に、相手のフォームを見て、コースを読み素早く正面に入るように指導した。また、反対側のコートに2枚ないし3枚のブロッカーつけて、レシーブ後のフォローの練習も加えた。

3.4.2 2段トスを目と指で連携する

つなぎの練習は、レシーブから2段トスを上げてスパイクを打ち、反対側のコートにブロッカーつけて、フォローの練習も加えた。これが一番難しいことだった。健聴者は、2段トスを上げる人が「レフト」と言ったり、アタッカーが呼んだり、とっさの判断を声でできるが、彼らにはそれができないため、反復練習をしていく中で目と指で連携する方法を見つけていった。例えば、アタッカーがトスをレフトへ高くあげてほしいときは手話の「上」、低めの際は「低い」という手話を使い、それをセッターが見るようにした。

3.4.3 切り返しの中の状況判断

アタックレシーブからの切り返しの練習では、トスを上げてもらって私がいろいろなポジションから強打、フェイント、ブロックアウト、クイック、移動攻撃などを打ち、それを拾ってラリーを続け、相手のコートを見たり、指でサインを送るタイミングをつかませた。この練習で、いろいろな状況での対処の仕方を覚え、スムーズに指でサインを送るタイミングもわかったようだ。

3.4.4 打点の高いスパイクに慣れる

夏休み静岡県富士宮市で合宿を行った。合宿が終わり、1つだけ私に不足していたのは、低身（170cm）のため、高さのあるスパイクが打てないということだった。高さのあるスパイクは打点が高く角度が付くので、腰をより低く構えてレシーブする必要がある。

そこで、長身者のスパイクに慣れることを目的として、千川クラブのエース3人（180cm前後）をお願いをして、スパイクを打ってもらい、それを拾って攻め返す練習と

高いブロックを打ち抜く練習と乱打をやった。

3.5 秋季リーグ中の対策

3.5.1 相手チームの分析

秋は春季リーグのビデオで相手を分析した。例えば、誰がサーブレシーブが苦手なのか、攻撃パターン、接戦の時にセッターは誰にトスを上げるのか、スパイクを打つときどこが空いているのかを確かめて対策を練った。

リーグ戦空き時間に、学生は他大学の試合を偵察し、相手チームが春と同じメンバーか入れ替えがあるのかチェックさせた。私は、試合を見て、サーブレシーブからの攻撃パターンをローテーション別に分析した。

3.5.2 ベンチから手話で作戦指示

ローテーション別分析をした結果、ブロックの的が絞りやすくなった。そこでサーブを打つ前に、私が試合中ベンチから声を出さず、手話で指示を送ったため、相手チームにわからずに試合を運べた。これは手話を知らない健聴者との試合では有効な手段ではないか。

例えば、左手でサーバーに「サーブは1番を狙え」というのを「1」の手話で、右手は「相手のレシーブが崩れたら、ライトから10番が打つぞ」というのを「10」の手話で簡単に表現した。また、合間を見て細かい指示を手話で指示した。しかし、ラリー中には指示が送れないのが難点だったので、何か方法は無いだろうか。

指のサインプレーに関しては、うまくできていたので、やはり時間をかけて指導した成果が出たと思う。秋季リーグの結果を表3に示す。負けた試合も展開次第では、フルセットまで持ち込めただけに「悔しい」の一言に尽

表3 平成5年度関東大学男子バレーボール
秋季15部リーグ戦績表
会場 武蔵野美術大（東京都小平市）

大学 順位	聖学院大 (14,7)	東京薬科 大 (14,8)	筑波技術 短大 (15,6)	武蔵野 美術大 (15,4)	国立科学 技術大 (15,3)	国音協 情報大 (15,8)	東京医科 歯科大 (15,5)	八千代 医科大 (15,9)	埼玉学環 大 (15,2)	勝 敗	最終 順位
聖学院 (14,7)	聖	x 0-3	x 0-3	o 3-0	x 2-3	o 3-0	o不 3-0	o 3-1	o 3-0	5 3	4位
東京薬科 (14,8)	o 3-0	薬科	o 3-1	o 3-1	o 3-2	o 3-0	x 1-3	o 3-0	o 3-0	7 1	2位 昇格
筑波技術 (15,6)	o 3-0	x 1-3	筑波	o 3-2	x 1-3	o 3-2	o 3-0	o 3-1	o 3-0	6 2	3位
武蔵野美術 (15,4)	o不 0-3	x 1-3	x 2-3	美術	x 0-3	o 3-0	x 2-3	o 3-0	o 3-1	3 5	5位
国立科学 (15,3)	o 3-2	x 2-3	o 3-1	o 3-0	科技	o 3-0	o不 3-0	o 3-0	o 3-1	7 1	1位 昇格
国音協情報 (15,8)	x 0-3	x 0-3	x 2-3	x 0-3	x 0-3	国音	o不 3-0	o 3-1	o 3-0	3 5	6位
東京医歯 (15,5)	x不 0-3	o 3-1	x 2-3	o 3-2	x不 0-3	x不 0-3	医科	o 3-1	x不 0-3	3 5	7位
八千代医 (15,9)	1-3	x 0-3	x 0-3	x 0-3	x 0-3	x 1-3	x 1-3	八千	x 0-3	0 8	9位
埼玉学環 (15,2)	o不 0-3	x 0-3	x 1-3	x 1-3	x 1-3	x 0-3	o不 3-0	o 3-0	o不 3-0	2 6	8位

*不：不戦勝及び不戦敗、(新)：新加入、(14,7)：前回春季リーグ戦14部7位、昇格：次期リーグ戦は14部へ

きるが、春よりも数段レベルアップした3位だと自負している。

4. 【学生からの感想】

「お遊び同然だったチームがよくここまで来た感じ」「聴障者を人として認めてもらえたのがうれしい」「耳が聴こえなくてもそれ以外は対等にできることを見せたかった」「自分の力がどのくらい通用するのかワクワクした」「最後の試合がとても印象に残った」「審判をやったときはプレッシャーを感じた」「健聴者と試合をして精神的・肉体的に鍛えられた」「チームワークの大切さを知った」と書いてあった。

5. 【健聴者との試合での問題点】

健聴者との試合で学生にいろいろ事が起こった。例えば、プレー中に隣のコートホイッスルが補聴器に入り、

反則と勘違いしてプレーをやめてしまったり、反則のホイッスルが聴こえず、スパイクが相手に当たったり、それがトラブルの原因となったことがあった。

現在、身障者スポーツ施設の体育館では、フラッシュランプが壁に埋め込まれて、反則などを瞬時的に光で知らせる。一般の体育館にも設置を望む。また、それをバレーのネットやポールにつける事はできないのか。

6. 【今後指導する際の注意点】

手話で指導する場合「頭で理解する前に体で覚える」「状況判断ができ、それに応じて反射的に動ける」「反復練習をする」ことと、プレー中は「指での連携プレーする」ことの重要性がわかった。今後指導するにあたって、これらの点を注意していきたい。これまで指導についてきてくれた学生と練習のお手伝いをして下さった人たちに深く感謝したい。